没後三百年記念出版

江戸時代前期の俳諧師、浮世草子作者井原西鶴に関する明治大正、昭和初期の資料約470点を纏めて刊行。
西鶴は人間をありのままに見つめ、雅俗折衷の文体で、好色物・武家物・町人物など多くの傑作を残し、尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉等近代文学に多大な影響を残している。

西鶴研究資料集成

竹野 静雄 監修・解題

芳賀一晶筆「浪華西鶴翁像」(久保克敬氏蔵)

全8巻

クレス出版

『西鶴研究資料集成』刊行にあたって

竹野　静雄

西鶴は寛永十九年（一六四二）大阪で生まれ、上昇期商業資本主義のただ中を生き、元禄六年（一六九三）、五十二歳で没した。若くして俳諧をたしなみ、師宗因の死後は、伝統美学の異化によって仮名草子の面目を一新、浮世草子を打ち立てた。その作品は、求利・情欲を肯定する時代の人間観の変化にも支えられて、大きく世に迎えられ、巨大な影響を残した。

西鶴は在世中から「二万翁」俳諧師といわれ、「好色屋の西鶴」と目されていた。また後続の舎衣軒や其磧はその娯楽性を多とし、団水は町人物の実用的教訓的性格を力説した。娯楽と教訓、まさに時代の二大ニーズによって評されたのである。

一七三〇年代、伊藤梅宇（『見聞談叢』）がその作風にようやく「人情」を見出すや、五井蘭州・伽藍堂がそれに次ぎ、さらに化政・天保期の京伝・春水・歌国・一鳳・黙老らも挙ってこれを受け継ぎ、世情人心に通ずる作家とした。十八世紀から十九世紀にかけて、西鶴はほぼ「世の人心」の作者として理解されたのである。文芸性についても、天明期の平秩東作がいち早く古典の近世化や文体の特徴的傾向を明らめ、文政期の喜多村筠庭はまた、卓抜な人世観察者の俳諧的手法を見抜いて、かれこれ西鶴研究の礎石としたのである。

明治に入ると、西欧近代文学に導かれて、さらに思想や人間性・人間観を汲み上げ、愛欲と金銭の人生的意味を捉える。こえて昭和期には、新たに集団描写の手法と笑いを実践的に会得することになった。いわゆる受容と作用の美学の行く立ては、およそこのようになるであろう。

今日、西鶴研究は文芸性はもとより即物的な諸レベルに至るまで、より細密化している。けれども、問題の始源まで遡って研究史を跡づけるものは、かなり少ないように思われる。たとえば助作・補作説、『一代男』の源語翻案説、俳諧の散文化説、八文字屋本の西鶴模倣説など、なべて明治三十年代までに指摘されたことにほかならない。現代の研究はより精密にこれを論ずるが、そのプライオリティは遙か明治期にあったのである。

今回、未見資料の掘り起こしを通じて、先行研究を大幅に増補・修正することができた。諸事情によって、むろん不備は免れないが、とりあえず明治大正期の一パノラマを開示することで、西鶴研究はもとより近代文学研究の一助となれば幸いである。

（山口女子大学教授）

●編集方針・校訂基準〔概要〕

1 本集成は、井原西鶴にかかわる作家論、作品論・解題、随想、文学史、著作年表、教科書、世相・風俗考証、辞典その他の資料を収録する。
2 資料収録年代は明治五年七月から、大正期に企画された叢書の下限、昭和三年五月までである。
3 排列は発表年月順とし、西鶴享受の時系列的パノラマが望めるよう意図した。
4 本篇の収録総数は四六七点である。
5 底本は、著作権者の指示あるものを除き、原則として初出・初刊本によった。
6 校訂は、原則として次の基準によった。
①漢字、仮名遣い、送り仮名、句読点、傍線・傍点などはすべて底本に準じた。
②ルビは原則として省略した。
③誤記・誤植等も底本のママとし、可能なかぎり右傍に（ママ）と注記した。
7 抄録資料については、章・節等の目次表記を省いた。
8 挿絵・図録等は、本文読解に必要なものを除き、省略した。
9 各巻に「解説」を付し、適宜、解題とその意義を略述した。
10 最終巻に「執筆者索引」および事情により収録できなかった「未収載資料目録」を併せ収めた。

西鶴研究資料集成　全8巻

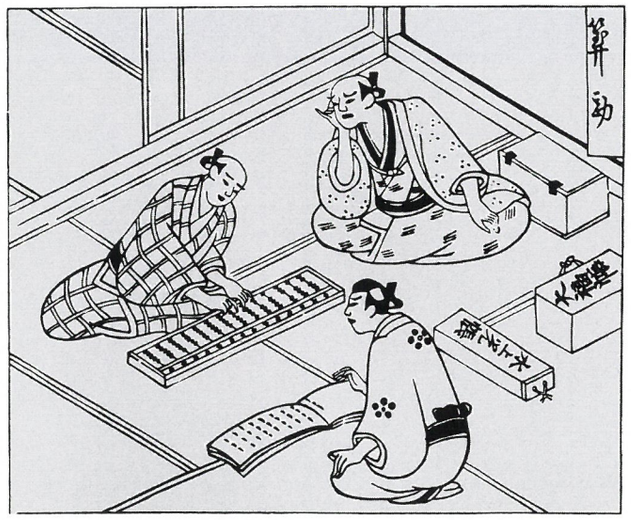
竹野静雄監修・解題

第一巻　明治5年～明治33年

〔明治5年〕　假名垣魯文・條野有人
著作道高唱
〔明治15年〕　田口　卯吉
『日本開化小史』
〔明治17年〕　依田　學海
西　鶴
〔明治19年〕　経済雑誌社
井ハラ　セイクワク
式亭三馬評判
〔明治21年〕　春のや主人
『學海日録』
〔明治22年〕　依田　學海
馬琴小説の效果
篁村先生の小説（「むら竹」一篇及二篇）　ふ、ち、
漣山人の『妹背貝』　藤の屋主人
四大奇書　不二山人
紅葉山人の『やまと昭君』　ふ、ち、
西鶴の墓　花竹堂
井原西鶴を弔ふ文　木崎好尚
日本小説の三大家　愛鶴軒西跡
文學上の流行　不知庵主人
日本の小説　楠仙子
〔明治23年〕　正岡子規
『小説史稿』　關根正直
元禄狂　紅葉山人
井原西鶴　幸田露伴
會心録　紺珠居士
小才大事を成さず　露伴
西鶴隠見本末　猛沙彌
俳諧一斑　饗庭篁村
井原西鶴の著書　江鳥生
見聞の儘　不知庵主人
『日本文學史』　三上參次・高津鍬三郎
元禄三大家に就て　鷦鷯子
西鶴本の批評のまへおき　江鳥生
『好色五人女』序　黒瘦子
時事漫言　（無署名）
〔明治24年〕
五人女を購ふの詞
好色五人女
『好色一代男』
『好色五人女』批評
時事漫言
時事漫評
『繪入好色一代女』『好色一代男』『本朝若風俗』
井原西鶴　依田　學海
井原西鶴
現今小説の醜文字　井原西鶴一代女
文弊
梓神子
元禄小説の流行
西鶴翁書像賛
西鶴翁畫像賛
青燈一穂
伽羅枕（紅葉山人著）
〔明治25年〕
『文學一斑』
伽羅枕及び新葉末集
讀小説法　少年園の爲めに
徳川氏時代の平民的理想
〔明治26年〕
慶安元禄年間の風俗圖解
人生の風流を懐ふ
明治甘二三年の文壇
今日の小説及び小説家
純美文界
〔明治27年〕
井原西鶴　戸川秋骨
井原西鶴　抱月子
西鶴是非　大橋乙羽
俳諧史博　（無署名）
西鶴全集の發賣禁止　高山林次郎
松壽軒西鶴　寒月
西鶴全集　佐々政一
人に答ふる書　鷗外・思軒・學海・竹二
『近松門左衛門』　篁村・紅葉・露伴
井原西鶴　寒月
津田房之助
大野洒竹
武谷紀之
大野洒竹
〔明治28年〕
自然私觀　大橋乙羽
西鶴の理想（人に答ふる書）　獺祭書屋主人
懐硯・西鶴名殘の友　不倒生
『珍本全集』・西鶴　（無署名）
近代艶隠者　大橋乙羽
芭蕉雑談　（無署名）
好色一代男の類本　獺祭書屋主人
〔明治29年〕　不倒生
『閨秀小説』を評す　魯庵生
眞と實と　抱月子
談林派傳系　大野洒竹
露伴　小湘庵
松羅玉液　升庵
〔明治30年〕　（無署名）
西鶴物復活　角田柳作
『井原西鶴』（影印）　（無署名）
『列傳躰小説史』　高山林次郎
明治の小説　寒月
新小夜嵐　佐々政一
『連俳小史』　鷗外・思軒・竹二
好色一代女（合評）　篁村・紅葉・露伴
好色本目録　寒月
井原西鶴　津田房之助
俳諧略史・檀林派傳系・俳諧年表　大野洒竹
井原西鶴傳　武谷紀之
西鶴五百韵・俳諧團袋　大野洒竹
〔明治31年〕
松壽軒西鶴　大橋乙羽
『日本文學史要』　佐々政一
〔明治32年〕
朝茶の子　魯庵生
二萬堂西鶴　山本郭外
『國文學史十講』　芳賀矢一
〔昭治33年〕
藝術の趣味　上田敏
兩吟一日千句　大野洒竹
『國文學小史』　和田萬吉・永井一孝
戀八卦柱暦　坪内逍遙・綱島染川編

第二巻　明治34年～明治45年

〔明治34年〕
『破垣』發賣停止に就き當路及江湖に告ぐ　内田魯庵
西鶴の句　紫影
『元禄時世粧』　笹川臨風
西鶴作『おせん長左』　星月夜・白鳥子・秋江生
『俳諧年表』　牧野望東・星野麥人
〔明治35年〕
『國文學史教科書』　高野辰之
『俳句小史』　佐藤紅緑
西鶴と夾山　青蓮庵
『本邦文學史講義』下巻　杉敏介
『新體日本文學史全』　藤井乙男閲・岡井愼吾著
『日本文學史』　池邊義象
〔明治36年〕
『國文學史教科書』　落合直文・内海弘藏
『俳諧名家列傳』　籾山釣
『西鶴名著集』上巻　藤本藤陰
西鶴の文章　沼波瓊音
西鶴二百十年忌　木崎好尚
西鶴と大阪　木崎好尚
紅葉山人追憶録　巖谷小波・丸岡九華
永代藏につきて　饗庭篁邨
〔明治37年〕
『日本文學史』　境野正
『増訂俳家人名辭書』　牧野望東編・吉原開増訂
〔明治38年〕
井原西鶴　水谷不倒
井原西鶴の著作物と他作混入　饗庭篁村
『少華族』上篇　自序　徳田秋聲
『元禄世相史』　佐々醒雪
『日本文學史』　大久保葩雪
〔明治39年〕　三味道人
元禄文學　淡島寒月
元禄の衣裳　高橋淡水
余の愛讀書　島崎藤村
西鶴の俳諧　田山花袋
浮世草子目録
私と西鶴
耽奇談
『時代文學史』
『博多小女郎浪枕』を舞臺の上に見て
『美文作法』
西鶴の『五人女』を評す　生島横渠
梗概　水谷不倒
井原西鶴の傳　水谷不倒
由来　幸堂得知
五人女時代の風俗　片上天弦
文章　坂本四方太
俳文　秋江
性格と意匠　抱月
『五人女』に見えたる思想　高濱虚子
西鶴の俳諧　中井浩水
影響　中井浩水
雑　淡島寒月
西鶴を生みし時勢　醒雪
歳晩の煤拂（井原西鶴）　（無署名）
〔明治40年〕
『日本文學史』下　武島又次郎
『校訂西鶴全集』　熊谷千代三郎
『日本文章史』　大町芳衛
西鶴小論　田山花袋
瑣言　幸田露伴
〔明治41年〕
『俳句評釋』　坂本四方太
井原西鶴（近世文豪評傳の一）　佐々醒雪
徳川時代の女性　宮崎三昧
『國文學史講座』　藤岡作太郎
『日本文學史』　芝野六助譯
『西鶴抱一句集』　竹の家主人
〔明治42年〕
近松と西鶴　高須梅溪
『近世世相史』　齋藤隆三
近松門左衛門　小山内薫
西鶴の研究　河井醉茗
藝術は人生の理想化なり　徳田秋江
『増補明治文學史』　岩城準太郎
『古今名家俳句講話集』　白藻曾編
西鶴と近松　對象に對する演繹的見方と歸納的見方　徳田秋江
『小説作法』　田山花袋
西鶴の句十句　内藤鳴雪
明治學院の學窓　島崎藤村
『インキ壺』　田山花袋
予が文學者となりし徑路　内田魯庵談
『文藝百科全書』　早稲田文學社編
〔明治43年〕
東洋美術圖譜　漱石
近松の藝術及人生　島村抱月
『元禄時代小説集』上巻　古谷知新
思つたまゝ（一葉女史の「濁江」及び其他）　徳田秋江
『源氏物語』と『好色一代男』と『ベルアミイ』　相馬御風
ひとり言　愛山生
文壇雑感　徳田秋江
西鶴が「おさん」と近松が「おさゐ」　野々口精一
上方唄の作者　佐々醒雪
文壇無駄話　徳田秋江
日記（明治43年9月）　内田魯庵
『西鶴集』　香雪園主人
『第二西鶴集』　香雪園主人
西鶴の縮圖とも見るべき名文　島村抱月
近松と西鶴との比較　正宗白鳥
井原西鶴　笹川臨風
文壇無駄話　徳田秋江
〔明治44年〕
奇抜なる珍書會　會員は知名の文士騒人　（無署名）
『元禄時代小説集』下巻　古谷知新
『評傳俳諧二百年史　元禄の巻』　齋藤溪舟
西鶴の文　好色一代男（節録）　大町桂月
『近世國文學史』　佐々政一
眞に文章を學ばんとする者に　内田魯庵



文壇無駄話　徳田　秋江
西鶴と浮世繪　和　道
『花袋文話』（明治45年）　田山　花袋
文壇無駄話　近松　秋江
西鶴の文章　近松　秋江
『新國文學史』　五十嵐　力
西鶴の作中に顯れたる『生活』（無署名）
ホンの無駄話　近松　秋江
西鶴の俳句　淡島　寒月
一代男世之介の旅（無署名）

明治篇　補遺
（明治22年）　其　川　子
本朝櫻陰比事（無署名）
（明治23年）
詩　月　旦（無署名）
詩　月　旦（無署名）
浪華づと　好尚堂主人
詩　月　旦（無署名）
浪華墓跡考　秋渚・好尚
（明治24年）
氣運已むべからず　風　潭　坊
（明治30年）
評苑　十一（無署名）
（明治35年）
西鶴の成功に關する觀察　幸田　露伴
（明治36年）
西鶴文粹（無署名）
『西鶴妙文集』（無署名）
（明治39年）
黄楊の水櫛（井原西鶴）　小林豐次郎
（明治40年）
師走坊主（井原西鶴）（無署名）
（明治41年）
徳川時代の小說　幸田　露伴
（明治42年）
好　色　本　幸　田　生
徳川時代の小說書類
（明治43年）
元祿文學　幸　田
（明治44年）
實業と文學との交渉　幸田　露伴
大經師昔暦　三田村鳶魚
西鶴佳作集第一冊巻首に題す　露伴學人

第三巻　大正2年～大正8年

（大正2年）
『西鶴文集』　幸田　露伴
藤岡博士第三回記念講演會に於ける藤村助教授の講演に就いて　松本彦次郎
西鶴に就いて　三井　甲之
西鶴の草子に見えし男達　あかひも生
「國民文庫」を評す　菊池　瓊
『西鶴文集』上　藤井　紫影
「君と私と」の私に　志賀　直哉
『西鶴一代男物語』　石川　巖
西鶴の作に就いて　藤村　作
天和元年より寶永六年に至る文學　大阪市參事會
（大正3年）
西鶴論　愛　山　生
西鶴讃　藤井　乙男
大阪藝術創始　草田杜太郎
『西鶴文集』下　藤井　紫影
『大阪名家著術目録』　大阪府立圖書館編
西鶴を讀みて　草田杜太郎
江戸文學に於ける近代人　草田杜太郎
七月の都から　草田杜太郎
徳川時代の所謂軟文學の價値　内田　魯庵
『名家俳句集』　藤井　紫影
（大正4年）
『西鶴の人々』（影印）
『椀久一世物語』　高須　梅溪
西鶴に現れたる近代主義的要素　宮崎　璋藏
『徳川文藝類聚　第三遍歷小說』　本間　久雄
（大正5年）　國書刊行會
『近代文藝雜話』　佐々　政一
淡島椿岳　内田　魯庵
俳諧入門　佐々　醒雪
井原西鶴の俳諧より創作に赴ける過程に就て　岡部美二二
徳川初期の花街風俗　江馬　務
シングの戲曲と西鶴の『大鑑』　菊池　寛
近代艶隱者　石川　巖
浮世榮花一代男・色里三所世帶・眞實伊勢物語　佐藤　鶴吉
（大正6年）
男色大鑑　片岡　良一
『近代小說史』　山口　剛
西鶴の淨瑠璃　石川　巖

椀久一世の物語　石川　巖
西鶴雜話　淡島　寒月
『東京の三十年』　田山　花袋
西鶴小論　田山　花袋
西鶴の句　（無署名）
（大正7年）
古版畫趣味の昔ばなし　淡島　寒月
風俗上より觀たる髯　江馬　務
趣味雜話　淡島　寒月
『人及び藝術家としての尾崎紅葉』　本間　久雄
江戸初期の民間服飾　江馬　務
風俗史上より見たる名妓吉野　江馬　務
西鶴新論—西鶴と金と—　秦　豐吉
男子間相愛風俗の沿革　森　德太郎
（大正8年）
『元祿時代觀』　中村　孝也
椀久一世物語　石川　巖
西鶴本の挿繪に就いて　水谷　不倒
文學繪畫上に見ゆる幽靈　江馬　務
室町時代季世より江戸中期に至る小袖の變遷

第四巻　大正9年

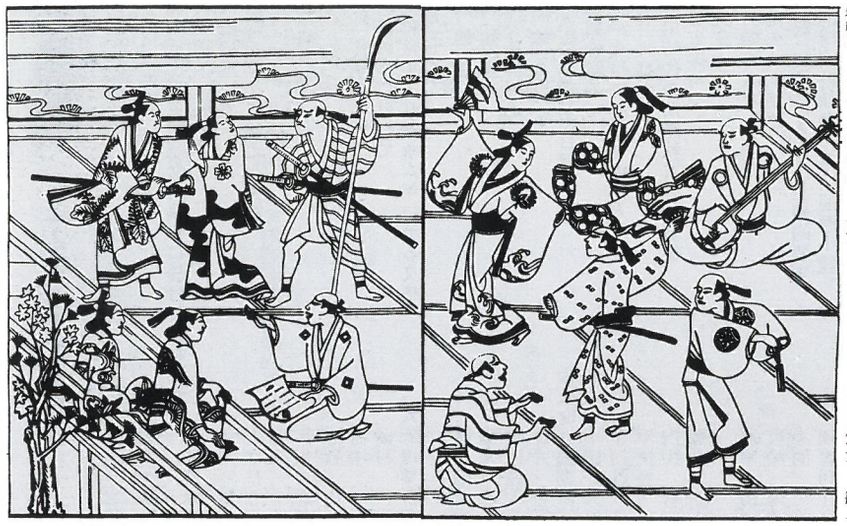
（大正9年）
『名妓吉野』　江馬　務
『西鶴の新研究』（影印）　鈴木　敏也
雜書讀みが道樂　菊池　寛
文藝閑談　菊池　寛
雜書を涉獵す　菊池　寛
西鶴と一九　宇野　浩二
愛讀書の印象　芥川龍之介
『近世日本小說史』　鈴木　敏也
元祿時代の女　高須　梅溪
『浮世草子西鶴本』（影印）　水谷　不倒
著者に質す疑義二三　石川　巖
質疑に答ふ　水谷　不倒

第五巻　大正10年～大正11年

（大正10年）
藝術家としての西鶴　藤村　作
浮世花鳥風月と浮世榮華一代男　藤井　乙男
『近代文藝史論』　高須　梅溪
徳川時代文學講話　徳田　秋江
『暗夜行路』　志賀　直哉
『俳諧史』　佐々　醒雪
『中學讀本中の俳句評釋』　高濱　虛子
私の文學に志した頃　島崎　藤村
文學志望者の讀むべき書物　菊池　寛
京の女　近松　秋江
（大正11年）
『灰屋紹益と吉野太夫』　江馬　務
『江戸と上方』　笹川　臨風
好色一代男の成立　山口　剛
俳諧師西鶴の研究　勝峰　晋風
『新選繪入西鶴全集』騎楽篇第一巻　石川　巖
きせる考　中島　貫一
西鶴の未だ知らざる疆域に立てる近松　鳶魚幽人
『近世日本小說史』前篇　鈴木　敏也
上村吉彌考　若原　史明
風俗史上より見たる吉彌結　江馬　務
明治に於ける西鶴　幸田　露伴
西鶴の生涯　水谷　不倒
西鶴本の挿繪　水谷　不倒
西鶴著作年表　水谷　不倒
西鶴の淨瑠璃　藤井　紫影
西鶴殘象　五十嵐　力
西鶴雜感　藤村　作
近代艶隱者の考察—西鶴作としての可能性—　山口　剛
西鶴の好色本に就て（特に質疑あるもの）　石川　巖
此頃の感想　田山　花袋
江戸時代前期の民間美顔術　江馬　務
『新選繪入西鶴全集』俳諧篇第一巻　石川　巖
諸家の西鶴研究書目　石川　巖
近松の世話淨瑠璃に見はれたる衣服　藤井　乙男
『上方文學と江戸文學』　藤村　作
近松の記念劇「天の網島」を見て　徳田　秋聲
元祿頃の洛中の歲暮　江馬　淳風
西鶴の描いた女性　赤木　桁平
『新選繪入西鶴全集』俳諧篇第二巻　石川　巖

第六巻　大正12年～大正14年

（大正12年）
天和元祿間の保守的容儀　江馬　務
『日本近世文學十二講』　高須芳次郎
寶船の沿革　若原　史明
『西鶴研究　金の巻』（影印）　木崎　愛吉
『近代の小說』　田山　花袋
西鶴に據るおさんの正體　尾崎　久彌
剳青の史的研究　江馬　務
「大阪堺筋椀久一世の物語」に就て　鈴木　敏也



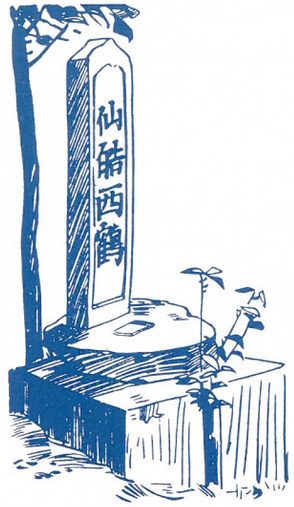
『近世國文學史』　佐々　政一
創作合評　佐藤春夫・久米正雄・加藤武雄
菊池寛・水守龜之助
ナゼ完全な『西鶴全集』が出ないのか　石川　巖
『新選繪入西鶴全集』騎楽篇第二巻　江馬　務
西鶴本に記されたる女子の容姿　淡島　寒月
人さまざまの觀月感　平林鳳二・大西一外
『新選俳諧年表』
（大正13年）
紙鳶の研究　江馬　務
『江戸文學選集』　鈴木　敏也
『綜合日本文學全史』　三浦　圭三
西鶴本に見えたる町家の女性　水野千代子
黒廈子『西鶴』小傳　石川　巖
西鶴の言葉　佐藤　鶴吉
藝術家としての西鶴　片岡　良一
人としての西鶴　山口　剛
西鶴と心中　和田　萬吉
西鶴自筆「胴ぼね三百韻」外二書小解　田中　辰二
元祿文學の背景　木谷義七郎
元祿時代の大阪及び大阪人　岡部美二二
人及び藝術家としての西鶴　片岡　良一
西鶴の俳諧　鈴木　敏也
西鶴の小說　石川　巖
『新選繪入西鶴全集』騎楽篇第四巻　（無署名）
浪華年代記　船　越　生
鴻池新田と文豪西鶴の「大下馬」
（大正14年）
俳人としての西鶴　前島　春三
近代日本國民史　元祿時代（下巻）　蘇　峰　生
西鶴の淨瑠璃「暦」の發見　藤井　紫影
明治十年前後　淡島　寒月
『本朝日本永代藏』　藤村　作
足袋の沿革　江馬　務
西鶴の女　片岡　良一
風流昔の花見　淡島　寒月
徳川時代の文章　徳田　秋聲
書齋偶語—西鶴とボツカツチヨ—　本間　久雄
炙のこと　水野ちよ子
『明治大正の國文學』　岩城準太郎
『明治大正新文學史觀』　小島　徳彌
西鶴雜感—特に五人女と二十不孝に就て—　片岡　良一
近世文化と大阪　西田直二郎
大阪と國文學　上田　萬年
「西鶴」も世に出る　耽奇樓主人

第七巻　大正14年～大正15年

〔大正14年〕
『近世生活と國文學』　麻生　磯次
「永代藏」と「胸算用」　春日　政治
デカダン的讀書　菊池　寛
『新選入『校訂』西鶴全集』騎楽篇續篇　石川　巌
『井原西鶴論』上巻　梅澤　和軒
〔大正15年〕　山本勝太郎
文藝と人生　菊池　寛
井原西鶴略傳　蘇武利三郎
浄世草子の創設―井原西鶴　鈴木　敏也
「寒月年表」　淡島　寒月
假名草子と井原西鶴　藤村　作
『井原西鶴』（影印）　片岡　良一

第八巻　大正15年～昭和3年

〔大正15年〕
西鶴の俳風　片岡　良一
西鶴と世之介　山口　剛
江戸時代中期に於ける世相と民間容儀服飾　江馬　務
『西鶴全集』解題　與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子
井原西鶴の墓　薄田　泣菫
西鶴の數字　藤村　作
西鶴講論好色五人女　林若樹・野々村蘆舟・笹川臨風
山口剛・三田村鳶魚・木村仙秀
鶴岡春盞樓・笹野堅・池田孝次郎
輪講好色五人女（續）　春　盞　樓
木村仙秀・鶴岡春盞樓・笹野堅・池田孝次郎
輪講日誌　林若樹・野々村蘆舟・三田村鳶魚
手拭の歴史　春　盞　樓
淡島寒月翁の僊化　江馬　務
梵雲庵淡島寒月翁を憶ふ　内田　魯庵
藝術の社會的地位に就いて　生方　敏郎
古典を讀んで　阿部　次郎
俳人西鶴提唱　正宗　白鳥
西鶴の俳歴補訂　頬原　退藏
とけしなし考　藤井　紫影



小説論　田山　花袋
「好色盛衰記」瞽見　鈴木　敏也
明治の小説　田山　花袋
私の受けた古典の影響―源氏物語其他　日夏耿之介
私の受けた古典の影響―随筆物から　江馬　務
風神送りの風俗　勝峰　晋風
『日本俳書大系』第七巻・談林俳諧集　解題　荻原井泉水
『日本俳書大系』第七巻・談林俳諧集　通説　尾崎　久彌
好色藝術の諸作家　石川　巌
明治大正に於ける西鶴本筆禍並に出版に就て　石川　巌
日本文學研究の動機　片岡　良一
西鶴武家物研究
〔昭和2年〕
『好色五人女』鑑賞　加藤　武雄
井原西鶴　石田誠太郎
解題　浮世草子　笹川　種郎
西鶴の名數　佐藤　鶴吉
西鶴町人物研究　片岡　良一
「おらが春」のさし繪　山口　剛
日本文學に現はれる経濟生活　山本勝太郎
江戸文學と遊里生活　尾崎　久彌
俳諧の稀覯書　頬原　退藏
西鶴好色本研究　山口　剛
〔昭和3年〕
西鶴俳諧鑑賞　佐藤　鶴吉
江戸版「好色一代男」に就て　尾崎　久彌
江戸文學概説　頬原　退藏
作者の推定　山口　剛
大正篇　補遺
〔大正元年〕　八百屋お七
西鶴の俳句　〔大正2年〕　三田村鳶魚
男　色　三田村鳶魚
文藝に於ける地方色の消長　幸田　露伴
〔大正4年〕
公娼文學より私娼文學へ　幸田　露伴
〔大正5年〕
浴　褌　論　三田村鳶魚
藝術的文獻に現はれたる日支兩國の國民性　幸田　露伴
余が好める秋の描写　高須　梅溪
〔大正6年〕
おちやツぴい　三田村鳶魚
人形俳優浮世繪論　三田村鳶魚
〔大正8年〕
樽屋おせんと八百屋お七　三田村鳶魚
初　鰹　高須　梅溪
變の病　一名癆瘵考　三田村鳶魚
〔大正9年〕
柳腰の研究　三田村鳶魚
芝居から出た染模様　三田村鳶魚
座　數　能　三田村鳶魚
人間美の競争　三田村鳶魚
男性間に於ける同性愛　三田村鳶魚
女形成熟の條件　田中　香涯
〔大正10年〕　鳶魚幽人
役者の紋　鳶魚幽人
丹前勝山の時代　三田村鳶魚
西鶴の當世顔　三田村鳶魚
西鶴冥土物語の反照　釋臣　炎涼
〔大正11年〕
松近心中物　三田村鳶魚
〔大正12年〕
江戸時代の高級遊女　三田村鳶魚
安阿彌の佛像―ちよいちよいの本尊―　三田村鳶魚
〔大正13年〕
びいどろ昔譚　三田村鳶魚
耽奇樓痴談（二）　耽奇生
〔大正14年〕
綿繪の大首　三田村鳶魚
太夫道中の見物　三田村鳶魚
元祿の藝角觝　三田村鳶魚
随筆三人吉三　三田村鳶魚
〔大正15年〕
江戸藝者の研究　三田村鳶魚
無益の殺生　耽奇樓主人
そゞろ言　鈴木　敏也
「島原會」の報條　（無署名）
饗庭　篁村

西鶴の全容がしだいに

文芸評論家
法政大学名誉教授
小田切　秀雄

わたしは西鶴学者ではないが、わたしの少年時代からの先生片岡良一が西鶴学者でもあったので、早くから西鶴作品にはしたしんできた。片岡は日本近代文学研究の戦前の代表的な学者で、林達夫とわたしで編んだ『片岡良一著作集』全十一巻がいま中央公論社から出ているが、かれは西鶴についても、大正末年から敗戦前にかけてこの作家を鋭い近代文学批評の眼と感覚でとらえて、独自な西鶴学者となっていた。

片岡から多くのことを学びつつもわたしは文芸評論の方へはみだしていったのだが、敗戦直後には、西鶴批評の先駆だった幸田露伴『井原西鶴』（明23）の全文を、岩波書店『文學』に勧めて載せるなど、西鶴批評史に興味をもち、角田柳作の本の入手に苦労するなどのことがあった。いま、クレス出版の『西鶴研究資料集成』を見ると、批評面だけでなく全面にわたって豊富で徹底した調査と集成が行われていて、西鶴という大作家の全容がしだいに明らかになってくる経過が具体的に示されている。

わたしはまた、戦争下に旧制中学国語科教員だったころ、まだ全く未研究だった西鶴『大矢数』の解読に一同僚と取組み、『元禄文学辞典』『俳諧大辞典』等を傍におきつつ一句ずつ読みほぐしてゆく、というほとんど無暴な努力を続けたことがあるが、そのころは注釈はもとより文献学的研究もまったくバラバラで、どこに何が出ているかがよくわからないのだった。それが今、この『西鶴研究資料集成』によってすべて一望のもとにおかれ、何をどこに求めたらいいかがただちにわかるようになった、ということは特筆にあたいすることだ。

『西鶴研究資料集成』を推す

早稲田大学名誉教授
神保　五彌

現代の、とりわけて戦後の西鶴研究は精緻を極めている。しかし、明治から大正にかけての西鶴・西鶴の文学に関する発言は、圧倒的に作家・評論家の側からのものであった。大正末年から国文学の世界もようやく官学アカデミズムの軌範から脱して、近世の文学をも正統な研究の対象とする機運が生まれ、とりわけて西鶴が大きく取りあげられることになり、戦後になって『定本西鶴全集』や『図録　西鶴』のような、研究者が安心して拠ることの出来る基礎的な資料が提供されることになった。しかしこの事は、明治の作家や評論家の発言を顧みなくてよいというものではない。それらは、新文学を創造するために、あるいは摂取したヨーロッパの文学に西鶴の文学がいかに酷似しているかをいうために、要するに自己の文学を語るために西鶴を取りあげているのであるから、研究と称するには遠いかも知れぬ。しかし、文学の創作に関りを持つ作家や評論家の発言は、その時どきの文学状況を反映しながら、意外に西鶴の文学の本質を的確に見据えている場合も多い。今日の研究が精緻を極めているがために、案外西鶴文学の本質から外れているかも知れないのである。竹野静雄氏は、西鶴に関する発言の見られる資料は、網羅して余すところがない。西鶴文学の本質を考えるために、また時どきに西鶴がどのように評価されて来たかを知るために、本書の刊行を祝し、双手をあげて推薦するものである。

＊　＊

没後三百年記念出版　竹野静雄 監修・解題

西鶴研究資料集成

■ご　案　内■

●第一回配本（平成五年十二月十五日）
第一巻　明治5年～明治33年
第二巻　明治34年～明治45年
第三巻　大正2年～大正8年
第四巻　大正9年

●第二回配本（平成六年二月十日）
第五巻　大正10年～大正11年
第六巻　大正12年～大正14年
第七巻　大正14年～大正15年
第八巻　大正15年～昭和3年

●A5判、クロス装、上製本、各巻平均六〇〇頁・解題付
第一回配本全4巻　揃定価六三、八六〇円（本体六二、〇〇〇円）
第二回配本全4巻　揃定価六五、九二〇円（本体六四、〇〇〇円）
全8巻揃定価一二九、七八〇円（本体一二六、〇〇〇円）

◇国文学書籍既刊本

芭蕉研究資料集成

全20巻　久富哲雄監修・解題
俳諧の世界のみならず、日本文学全体に多大な影響をおよぼした芭蕉の没後三百年を記念し、人物作品の価値ある研究書を集成。
明治篇全9巻
揃定価一〇九、一八〇円（本体一〇六、〇〇〇円）
大正篇全11巻
揃定価一五四、五〇〇円（本体一五〇、〇〇〇円）

蕪村研究資料集成

全17巻　久富哲雄・谷地快一監修・解題
日本・中国を問わず、古典に親しみ、俳諧に絵画に、自在なる境地を志向した蕪村の明治・大正期に刊行された基礎研究資料を集成。
揃定価一九一、五八〇円（本体一八六、〇〇〇円）

俚言集覧　自筆稿本版

全11巻　太田全斎編　ことわざ研究会監修・解題
江戸時代の代表的な三大国語辞書の一つ『俚言集覧』の唯一の稿本を『移山伊呂波集』とともに復刻。活字本にはない書き込み等も多く、研究者に新たな資料を供与する。
揃定価一五四、五〇〇円（本体一五〇、〇〇〇円）

影印仮名つき錦繡段・三體詩・古文真寶

久富哲雄編・解題
江戸期に刊行された貴重な振仮名つき漢詩文集を復刻、『錦繡段』『三體詩』は、天和版と元禄版の二種類を収録。近世の文学作品読解の参考となる文献集。定価一〇、三〇〇円（本体一〇、〇〇〇円）

KRESS　株式会社クレス出版
〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5 メローナ日本橋
☎03(3808)1821　FAX03(3808)1822